



会議レポート

第79回全国大会

～オープン・イノベーションと情報処理～

情報処理学会最大のイベントとして第79回全国大会が2017年3月16日～18日まで名古屋大学にて開催された(写真1,2)。今回の全国大会の講演件数は1,441件、参加者は2,936人と例年と同程度となり大会実行委員長としては安堵している。また2015年から始まったニコニコ動画での生中継の視聴者数は10.8万人であり、イベント企画やIPSJ-ONEを中心に会場外からの参加も多数あることもここ数年の特徴である。なお、ニコニコ動画の「情報処理学会チャンネル」を通じて現在でも過去の学会のイベントやIPSJ-ONEを視聴できるので、まだ見ていない方はぜひご利用いただきたい。

全国大会の開催準備は1年以上前から始まる。全国大会では30近くの講演会場と5カ所のイベント会場、そしてIPSJ-ONEの会場が必要になる。早期に日程を確定させるには会場予約が必須であるが、会場によっては早く予約ができないため、代替の会場を確保するなどの考慮が必要であった。また、すべての会場のプロジェクタ・接続コネクタ等の設備確認、ゲスト用Wi-Fiネットワークの利用確認が必要である。実際、一部の会場ではWi-Fiが利用できなかったため、仮設のアクセスポイントを設置して対応することとした。また、20を超えるイベント企画が行われ、希望に応じた会場の割り当て作業を行った。加えて、スポンサーや展示募集なども行い、結果として本大会スポンサーはゴールド5社、シルバー6社であり、展示は14件であった。

本会では、国際化の一環として海外学会との連携も進めている。今回の全国大会では、初日にIEEE Computer Society会長のJean-Luc Gaudiot、中国計算機学会CCF (China Computer Federation) 副会長のNinghui SUN、韓国の情報科学系学会KIISE (Korean Institute of Information Scientists and Engineers) の会長Bonghee HONGによる招待講演をいただいた。また、各学会の代表団と本学の代表団との間でトップミーティングを行い、MOUや今後の連携のためのミーティングを開催した(写真3)。

多数開催された魅力あるイベントの一部を紹介すると、



写真1 全国大会の看板



写真2 名古屋大学



写真3 トップミーティング

最近注目されている「人工知能とディープラーニング」に関する特別セッションを理研AIPの杉山将センター長を迎えて行ったり、「情報通信技術が先導するオープンイノベーション」ではJSTやNTTドコモ、トヨタ自動車のオープンイノベーション担当者からの講演をいただいたりした。名古屋大学では2017年4月に「情報学部」が設置されることに関して「情報学的アプローチによる情報科入試」や「情報科系専門学科カリキュラム」「メタサイエンスとしての情報学」に関するセッションも行われた。さらに名古屋大、筑波大、早稲田大、豊橋技科大の情報系リーディング大学院が連携して「将来の情報学リーダーが創造する新しい価値」というセッションも行われた。本会が進めている情報処理技術者のための資格CITP (Certificated IT Professional) に関するセッション



写真4 懇親会の様子



写真5 IPSJ-ONE

ンも行われ、6,000名近い認定技術者が生まれていることや、国際化への対応などが報告された。

初日の夜には、野依記念交流館で懇親会が開催された(写真4)。今年はジュニア会員を含め多数の参加で賑わい、特に、司会の長尾確副実行委員長が電動二輪車に乗って登場し、HoloLensを使って遠隔で風船を割る、というパフォーマンスで大いに盛りあがった。

最終日の午後には気鋭の若手研究者によるライトニングトーク形式のイベントIPSJ-ONEが開催された(写真5)。研究会からの推薦からさらに選抜された17名が登壇し豊田講堂を埋めた聴衆を魅了した。この会場の収容数は1,500名を超えるため、集客が心配であったが、結果として多数の聴衆に恵まれた。IPSJ-ONEでは、実は前日に濃密なりハーサルが行われ、トップ研究者同士で、素晴らしい発表にさらに磨きをかける作業が行われている。私も少し参加させていただいたが、IPSJ-ONEの企画・実施委員や発表者が本気で良い発表を作り上げようという熱気を感じた。この熱気が本番でも良い結果となり素晴らしい発表に結実していた。見ていない方は、2時間の視聴をぜひともお勧めする。なお、本会では2015年より聴覚障害者を対象とした情報保障に取り組んでいる。本大会でも講演会場おける要約筆記(パソコン利用のノート取得)や、複数のイベント会場で音声認識による字幕付与を企業からの支援を受けて実施した。IPSJ-ONEでは自動付与された字幕も配信・録画されている。



図-1 IPSJ79 スタンプラリー画面



図-2 音声ナビゲーションの画面

今回の大会では、全国からの参加者の利便性を向上させるために、特別に全国大会専用のアプリ「IPSJ79 スタンプラリー」を企画した(図-1)。以前の全国大会では専用のアプリを提供したこともあったが、利用者が少ないため、ここしばらくはWeb上でのプログラム提供のみであった。この現状の打破と、新たな取り組みを目的として、このアプリでは、スタンプラリーで名古屋大学内の散策を楽しんでもらうと同時に75個のBLEビーコンを学内に設置し、屋内外の音声ナビゲーションを実現した(図-2)。名古屋大学では、講演会場やイベント会場が地理的にも離れた9会場に分散したため、会場間を迷わず移動してもらうことも重要であった。また、実は昨年の全国大会懇親会において「来年はBLEビーコンを使ったIoT実験を行います!」と私が宣言してしまっており、本アプリはIoT実験を兼ねていた。当初は来場者にビーコンを配布することを想定していたのだが、3,000人近くの参加者に対応することは困難と判断した結果でもあった。

全国大会が3月16日から始まるにもかかわらず、アプリの企画は2月に始まった。AppStore等への登録を考えると開発期間は1カ月を切っており、今から思うともう少し早く開発を決断すべきであったが、当時は学会の開催準備と同時に進めていたためそこの余裕がなかった。Android版とiPhone版の両方を開発するために、MonacaというHTML5とJavaScriptベースの開発環境を利用した。スタンプ取得のためにQRコード読み取り、屋内位置取得のためにBLEビーコン読み取りが必要であったが、プラグインで対応した。また、学内地図については、OpenStreetMap(OSM)から名古屋大学周辺のデータを獲得し、それにJOSMというツールを使って各会場の情報を追記した(図-3)。さらに独自地図レンダリングサーバを通じて表示した(図-4)。加えて全会場間に歩行空間ネットワークを構築し138のPOI、168のランドマークを登録し、任意の場所から音声ナビ

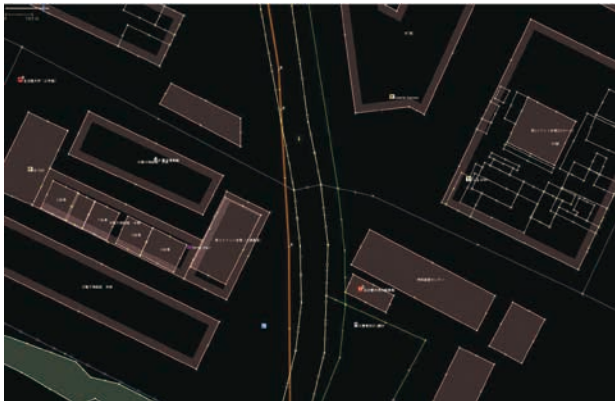


図-3 OSMで編集された地図



図-4 会場番号まで表示されている地図

ゲーションができるシステムを実現した。学会の9会場に加え名古屋大内の施設3カ所にQRコードのスタンプを設置した。スタンプを獲得した参加者には、抽選で景品を提供する仕組みも構築した。なお、スタンプラリーの実施時間は、講演時間外の休憩時間のみとしている。最終的な結果としては、残念ながらアプリの利用者は100名未満であったが、複数のスタンプを取得した参加者からは、移動経路が取得できており、その行動分析を行った。本アプリや行動分析の詳細についてはDICOMO2017¹⁾で発表するので興味ある方は参照されたい。

最後に、今大会が成功裏に終わったのは大会組織委員会、間瀬プログラム委員長およびプログラム委員、安田名誉実行委員長および実行委員、アルバイト学生、学会事務局、IPJSJ79スタンプラリー開発に協力した河口研学生の献身的な貢献による。本稿が今後の全国大会開催に少しでも役立てたら幸いである。

参考文献：
1) 岡田他：BLEを用いたIPJSJ79スタンプラリーの開発と行動分析、DICOMO2017。

(河口信夫/名古屋大学・全国大会実行委員長)



読後のご意見をお送りください

本誌では、現在約160名の方々に毎号のモニタをお願いしておりますが、より多くの読者の皆さんからのご意見、ご提案をおうかがいし、誌面の充実に役立てていきたいと考えておりますので、毎号巻末に掲載しております所定の用紙またはWebページ (<http://www.ipsj.or.jp/magazine/enquete.html>) をお使いいただき、奮って事務局までお寄せください。

一般社団法人 情報処理学会 会誌編集部門
〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台1-5 化学会館4F E-mail: editj@ipsj.or.jp Fax(03)3518-8371